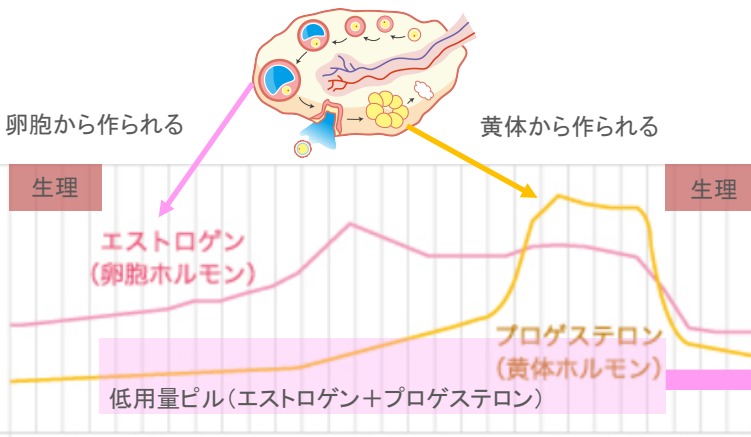


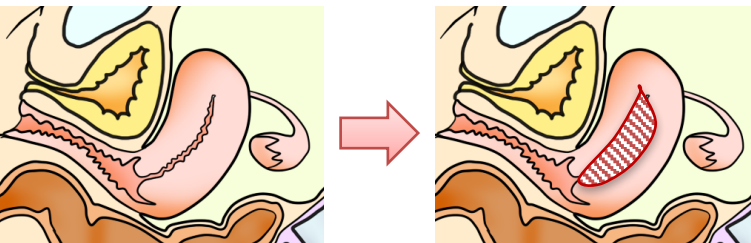
低用量ピルの内服と注意点

低用量ピルは、通常の生理で産生されるホルモンであるエストロゲンとプロゲステロンを少ない量で持続的に内服する事で、排卵を抑制したり、月経の量や生理痛を減らす薬剤です。



通常の生理周期のパターン
2つのホルモンにより、排卵が起こり、子宮内膜も厚くなります。妊娠しなかった場合、子宮内膜が剥がれて生理となります。

低用量ピルを内服したパターン
2つのホルモンが少ない値で維持され、排卵が起こらず、子宮内膜も薄くなります。



エストロゲンとプロゲステロンは子宮内膜を厚くするホルモンです。子宮内膜が剥がれる現象が毎月起こる生理の出血です。

低用量ピルを使用するケース

- 避妊目的
- 過多月経
- 月経困難症
- 月経不順

低用量ピルの内服方法



生理開始5日以内から1日1錠、なるべく決まった時間に内服して下さい。28錠タイプの最後の7錠にはホルモンは含まれておらず、飲み忘れを防ぐための偽薬です。21錠タイプは3週間内服1週間休薬を繰り返す内服方法です。

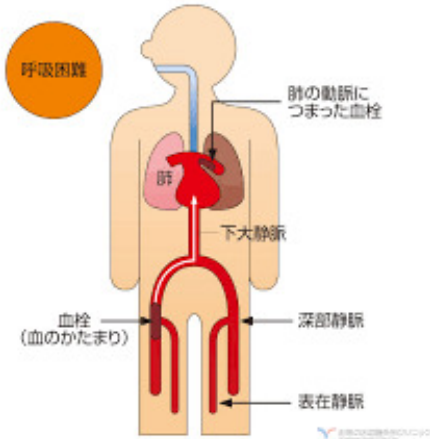
Point 内服を忘れた時の対応方法

1. 1錠の内服忘れ: 飲み忘れた1錠をすぐに内服し、残りは予定通り内服する。
2. 2錠以上の内服忘れ: 飲み忘れた錠剤のうち直近のものを内服し、残りは予定通りの服用する。連続して7錠内服するまでは、きちんと避妊をする。

低用量ピルの副作用

低用量ピルの内服開始後、不正出血(12%)・嘔気(7%)・体重増加(5%)・気分変調(5%)・乳房緊満(4%)・頭痛(4%)といった症状を呈する事があります。しかし、不正出血以外の症状は低用量ピルとの因果関係は証明されておらず、いずれの症状についても内服の継続により、落ち着いてくる事が多いです。低用量ピルで最も注意が必要なのは、エコミークラス症候群(肺血栓塞栓症)や心筋梗塞といった血管に伴う副作用です。

深部静脈血栓症・肺血栓塞栓症



深部静脈血栓症とは、足の太い血管に血の塊ができてしまう状態です。この血栓が剥がれて、血液の流れに乗ってしまうと、肺の血管や脳の血管に血栓が詰まってしまいます(梗塞)。低用量ピルの内服は、深部静脈血栓症のリスクを上昇させます。

1万人あたり:非内服 1-5人・内服 3-9人

ただし、妊婦さんは1万人あたり 5-20人、産褥婦さんは 40-65人と、低用量ピルの内服だけでは過度に発症リスクが上昇する訳ではありません。他のリスクが重なる事でリスクが上昇してしまうため、定期的に外来を受診して頂き、内服継続を判断します。

深部静脈血栓症を疑う5つの症状

- 1) 激しい腹痛
 - 2) 激しい胸痛・息苦しさ
 - 3) 激しい頭痛
 - 4) 視野の異常・舌のもつれ・意識障害
 - 5) ふくらはぎの痛み・むくみ・発赤
- これらの症状があったら、必ず病院を受診して下さい

血栓症のリスク

- ・年齢: 40歳以上
- ・肥満: $\text{体重(Kg)} \div \text{身長(m)} \div \text{身長(m)} > 30$
- ・高血圧
- ・肝機能障害
- ・片頭痛(特に前兆を伴う場合)
- ・自己免疫性疾患(抗リン脂質抗体症候群)
- ・産後4週以内
- ・喫煙: 特に1日15本以上の喫煙者には処方できません

当院の低用量ピル処方方法

- ・毎回問診・血圧測定・体重測定を行います。
- ・初回処方時はチェックシートの記入をお願いします。
- ・初回処方時は副作用などのチェックをするため、1シートのみ処方となります。
- ・保険が効くピルは最大2シート・自費のピルは最大3シートまで処方します。
- ・年に1回子宮がん検診・採血検査と経膈超音波検査を行います。
- ・ピル内服中は1年に1度乳がん検診を受診して下さい。